

---

# 星の王女

ダイナマイトドラゴン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星の王女

### 【Nコード】

N8735T

### 【作者名】

ダイナマイトドラゴン

### 【あらすじ】

SF・ファンタジー。やや長編。スターフィール大陸に再び流れ星が落ちた。それはアン女王の伝説を蘇らせていく。最悪の形で。

## プロローグ

星暦一七二三年、タリアン王国のある場所。

「おばあちゃん、あれ！」

フランソワはハインの指差す方を見た。

流れ星ひとすじ。

長い長い白い尾を引いて落ちていく。そして最後まで消えずに地平線の向こ

うに落ちて行った。

「……きれいだったねえ、おばあちゃん」

「……ああ、とっても。アン女王が落ちて来たのもあんな流れ星だったんだろ

うかねえ」

「アン女王？」

きよとん、とハインは尋ねた。

「おや？ハインは聞いた事が無かったのかね？」

「うん」

「それじゃあ、聞かせてあげようかね。アン女王様のお話を」

「うん！」

## 第一話

シノは村はずれの森に来ていた。母に必要な薬草を摘むのである。もちろん避難命令が出ている事は分かっていた。

籠をちらりと見た。もうすぐ一杯になる。ほう、と一息ついた。がさり。

振り向く。二本足で立つ鎧を着たトカゲ。初めて見た。噂に聞いた通りだった。湾曲した禍々しい剣を持ったそれはシノを見ていた。ニタリ、笑ったような気がした。膝が笑う。歯を食いしばる。後ろを向いて走り出す。やはり追ってきた。胸を恐怖が締め付ける。息が上手く出来なくなってくる。ただ、手に持つ籠の存在だけがシノの足を動かしていた。しかし、限界が来るのは早かった。何かにつまずいたのかどうか、シノは転んだ。すぐ後ろで草を踏む音。そっちを向く勇氣はすでに残ってなかった。立ち上がれないまま、シノは遠ざかるうとあがく。草を踏む音。絶望がそこに来ていた。

蹄の音。

シノははっとそちらを見た。すでに音はかなり近い。そして現れた騎影。馬上の男は既に剣を振りかぶっていた。トカゲも視界に入った。騎影に向かって剣を構えようとしていた。その姿が真つ二つになった。崩れ落ちる。死体は残らない。シュウ、黒い煙になって消えてしまった。

助かった。その事実がなかなか飲み込めない。ただただ目に映る光景を呆然と眺めるしかなかった。男が馬から降りた。目が会った。シノの感情が再び動きだす。

とくん。

男はしゃがみ、シノの顔を覗き込んだ。

とくん、とくん。

「シャッコ村の者だな。大丈夫か？」

シノは頷く。たくさん頷く。

「なら良かった。村の者は皆すでに避難し終わっている。それに奴らが他に近くにいないといけない。さ、君も早くタニアン砦に」

目の前に差し出される大きな手。シノはぼうつとその手を見つめる。気がついた。慌ててその手を掴む。大きく暖かな手。シノは引き上げられる。が、バランスを崩した。再び崩れ落ちようとする体をしっかりと支える力強い手。

「怪我をしているのか」

「足を……くじいてしまったようです」

男は頷いた。シノは宙に浮いた。抱き抱えられたまま馬上へ。

「しっかりと掴まってる」

シノは頷いた。そして言葉に従った。

男は馬を走らせる。無言で。その胸に顔を顔を埋め、やがてシノは口を開く。

「すみませんでした……」

「うむ」

そう言ったつきり、男はまた黙り込んだ。男はシノの行動を責めるでもなく、気を安らかにする為の言葉を掛けるでもなく、ただ謝罪を受け入れた。

「あの……」

シノはまた口を開く。

「うん？」

「ありがとうございます」

「あ、あー、……いや、これは私の任務でして、その、……あ、私はタニアン砦で一番隊の隊長をやっているエイタルという者でして

……」

「あ、私はシノと言います」

「あ、ああ……」

そしてまた二人は黙った。

しかし、先程までとは違う空気が二人を包んでいた。

## 第二話

「隊長！ご無事で！」

出迎えたのは巨漢の兵士だった。

「デン、センシヨの森で奴らの一体に遭遇した」

「そ、それは……」

「ああ、もう、あまり時間が無いようだ。俺はこのままメガ口殿の所に報告に行く。お前はこちらの女性を案内してくれ。足を怪我しているそうだ。丁重にな」

「はっ」

デンの返事にうなずくとエイタルは馬を再び走らせる。シノはその後ろ姿をじっと見送った。

「シノ！」

歳のいった女性がシノを見つけるとものすごい勢いで近づいてきた。

「お母さんっ」

目を赤くして怒りの表情を浮かべたシノの母親はシノの頬を張ろうと手を振り上げた。しかし、杖をつくシノの姿を見て手は力を失い、怒りの表情も消え失せる。残ったのは涙だけだった。

シノの肩を抱き、声を殺して泣き始める。

「お母さん……ごめんね……」

その様子を静かに見守っていた巨漢が口を開く。

「それでは私はこれで」

優しいな微笑みを見せ、背中を向けた。

「あ、あの、ありがとうございました！」

巨漢は振り向かないまま手を上げ去っていった。

そこには老人と子供ばかりで若者はいなかった。男も女も動ける

者は役割を与えられ、どこかで働いているのだろ。私も、とシノは思った。

（私もエイタル様のお役に立ちたい……！）

シノは強く願った。

落ち着いたシノとシノの母親は周りの老人達と情報交換を始めた。シノが見たトカゲの化け物の話をすると周り中からどよめきが起った。

「や、やはりあの話は事実だったのか……」

老人の一人が呟く。北の小国ツツメスをあつと言う間に制圧した異形の兵士の話はツツメスからの難民によって周辺諸国に広まっていた。

「今回の流れ星は男だったらしいが……」

ため息をつく老人達。皆、子供の頃から聞かされていたアン女王の伝説には憧れのような感情を抱いていたのだ。自分達に降りかかる災厄と醜悪な化け物はそれと結びつけるのには抵抗があった。

「しかしなあ……そう言えば、アン女王様も周りの国を次々と従えていった訳だし……」

「ああ……、だがしかし……」

俺達が聞いてきたアン女王の話とはあまりにも……、そんな感情が老人達の表情を暗くする。

### アン女王の伝説。

遙か昔、流れ星がスターフィールドの地に落ちた。その流れ星は女の子だった。アンと名乗ったその少女は不思議な力を持っていた。やがて、リクヨウの宮廷に迎えられた少女はその力で次々と周りの国々を従えていき、ついにスターフィールドを統一した。

そして百年が経った。アン女王は現れた時と変わらない若々しいすがたで健在だったという。それは二百年が経っても変わらなかった。三百年が経とうかという時、アン女王は消えた。何の前触れも

無く、突然消えたのだという。

現在ではその話ははつきりと伝えられているのにも関わらず、半神話的扱いになっていた。信じるものも多くいたが疑う者もまた多い。疑う者の考えでは特にアン女王が絶世の美女だというのが眉唾ものだという。

しかし、どちらにせよアン女王の伝説はスターフィール大陸に住む者にとって身近な存在であった。

陽が落ち、暗くなってきた。村の若い女達が帰ってくる。シノとまたひとしきり互いの無事を喜びあっているうちに夜は更ける。皆、横になっていくが眠れぬ者も多かった。そして、ついにその声が響き渡る。

「敵襲――――！！」



### 第三話

トカゲ達は瞬く間にタニアン砦を取り囲んだ。ある程度の知能は持っているのか、巨大な丸太を大勢で抱え、城門にうちつける。その他の者は城壁に手をかけ、よじ登ろうとする。砦の兵士達は城壁の上から弓で迎え撃った。数体黒い煙となって消える。それを見て兵士達の士気は上がる。

得体のしれない異形の兵士。今までは恐怖と不安しか抱けなかった。しかし、自分達の手で倒せた事に勇気づけられ、弓を引く手に力がこもった。

シャツコ村の力自慢の男達も投石で援護する。その他の男達も武器の補給に懸命に動いていた。トカゲ達はなかなか上がってこれない。

ある一人の兵士は思った。これは俺達やれるんじゃないか、勝てるんじゃないか、と。そして視線を上げてしまった。砦を囲むトカゲの数を見てしまったのだ。

恐怖と絶望に心が悲鳴をあげそうになる。が、故郷に残してきたある顔が浮かんだ。踏みとどまれた。ここでどんなに恐怖したとしても絶望したとしても手を止める訳にはいかない。男はまた弓を引き絞る。

城壁よりも城門が危なかった。巨木を持つ手は減るはしから補充され、門を撃つ勢いは決して衰えない。内側から支える手は徐々に押されていった。

そしてついに門が破られた。

中庭で迎え撃つのはタニアン砦の一番隊。先頭に立つのは隊長のエイタルであった。最初に門の隙間から出てきたトカゲを一刀で切

り捨てる。

「続け！」

士気が上がる。兵士達は目の前の光景に勇気づけられ、トカゲ達に斬りかかっていった。

終わらない戦闘。

兵士達の身体は疲労に蝕まれていく。倒れていく仲間達。トカゲの数は減らない。徐々に押し込まれていく。

エイタルはまだ立っている。しかし、やはりその動きは鈍くなっていた。それでも懸命に剣を振るう。周りで劣勢な仲間の分まで。

デンの頭上に輝く刃が見えた。距離が。考える間も無く剣を投擲。今まさにデんに剣を振り下ろそうとしていたトカゲの眉間に突き刺さる。消えるトカゲ。そこに転がるエイタルの剣。そして丸腰のエイタルに剣を向ける別のトカゲ。

「隊長――！」

今、命を助けられたばかりのデンが駆けつけようとする。間に合わない。

エイタルの命は今、尽きようとしていた。

その時、風が吹いた。

## 第四話

エイタルの前のトカゲが裂けた。周りのトカゲ達も裂けていく。風が中庭を駆け巡り、あつという間にトカゲの群れは消滅してしまった。

兵士達は呆然とした。何が起こったのか理解出来ない。周りを見渡す。すぐに見つけられた。地下へと続く通路の扉が開いている。その前にいた。女が浮かんでいた。

「シ……シノ………さん？」

エイタルは呟いた。まさしくそれはシノであった。呼び捨てに出来なかったのは彼がヘタレなせいであつたが疑問形なのは無理からぬ事であつた。

シノは宙に浮き、ほの白く輝いていた。その目は薄ぼんやりと半分閉じ、何の表情も浮かんでなく、夢でもみているかのようなだった。皆がその姿に見惚れている所に新たなトカゲ達が次々に飛び込んできた。

シノの腕が上がる。皆が見ていた。その手のひらは前を向いていた。風が吹いた。

トカゲ達は切り裂かれ、黒い煙と化した。兵士達はそちらの方もちらりと見、何が起こったのか理解した。

すーっとシノが宙を移動した。門へ。門の外へ。手を上げたまま。その前に立つトカゲ達は次々と煙と化す。シノは皆の周りをぐるぐる回る。トカゲ達は消えていく。そしてついに皆を取り囲んでいたトカゲは一体残らず消えてしまった。

シノは再び門の中へ。宙にういたまま。戦士達は城壁で戦っていた者も、補給に走り回っていた者も、中庭で迎えた者はもちろん、シノに見入っていた。

シノはすーっと中庭の中程まで進み、そこで止まる。

皆がかたずを飲んで見守る。

ふっと、シノの体から力が抜けたように見えた。シノの身体が落ちてくる。

皆、あつと心臓が止まるかのような衝撃を受けたが、一人の男がその身体を受け止めた事により安堵のため息となった。

受け止めた男はエイタルであった。

計算通りであった。

## 第五話

「う……うん……」

シノが目を覚ます。一番近くに母の顔が。その向こうにエイトルの顔が見えた。心配そうな、ほっとしたような、そんな顔。

「大丈夫？痛い所は無い？」

母が問う。ううん、笑みを浮かべて首を振る。そして、体を起こした。見つめたい顔の向こうに見た事がない、やや威厳がある顔があった。

「シノ殿、こちらはタニアン砦の長、メガロ大隊長です。少しシノ殿にお話が、と」

感情を抑えた声でエイトルは言う。そんなエイトルを少しの間見つめ、シノはメガロの方を見る。

「初めまして、メガロ様。この度は私の村を助けて頂いてありがとうございました」

「あ、いやいや。それは当然の事。それより、先程の……その……」

メガロは言葉を探す。この女性はある時とはあまりにも印象が違う。どう聞けば、何を聞けばいいのかなか判断出来なかった。

シノは微笑む。

「あの時は……」

あの時、シノは熱を出していた。足の怪我のせいか、擦りむいた所から菌が入ったのか別の原因かは分からない。そして、あの声が響いた時には意識を失っていたのだ。そして皆が怯え震える中、光り始めたのだ。

「もちろん、私にも何が起こっていたのか、私が何をしたのか分かっていませんでした」

その言葉を聞いてむしろメガロはほっとした。しかし、シノは言

葉を続けたのだ。

「今は全て分かります」

メガ口は気を引き締められた。シノはその隣を見る。エイタルもまた緊張した様子でシノの次の言葉を待っていた。

「アン女王……」

その言葉を出すのにシノは少しの勇気が必要だった。その言葉は周りの者をはつとさせる。

「アン女王が私に力を貸してくれたのです。私は今、自分に何が起こったのか、自分が何をできるのか理解しています。大丈夫、これからどんな敵が来たとしても私がこの皆も私の村の人達もあなた達も守ってみせます」

胸を張り真っ直ぐにメガ口を見て言いきった。

「そ……それは……」

信じられない。しかし、さっきの光景はそれ以上に現実離れしていた。受け入れるしかなかった。一方、隣のエイタルは違う事を考えていた。

「シノさん、それは、その力を使う事でシノさんの体には危険な事は無いのですか？」

シノは嬉しくなった。この状況で、こんな時に真っ先に私の事を気遣ってくれている。恥ずかしそうな照れたような笑顔が浮かぶ。

「大丈夫です。安心して下さい」

その言葉を聞いてやっとエイタルは緊張を解いた。

エイタルの腕の中で意識を失った後、シノは夢を見たのだ。今まで見た事が無いぐらい美しい女性が説明してくれた。シノは真っ先に聞いた。それで私はあの人を……皆を守るのですか？ と。美しい女性は優しく微笑んで力強くうなづいてくれた。ええ、もちろん。そして付け加えた。

「その代わり、あなたは命のひとつやふたつは覚悟しておいて下さいね」

ツツメス。王宮の奥深く。暗い部屋で一人、長髪の男が豪華な椅子に座っていた。

ニヤアッと笑う。

「来たか、アン」

そう呟くと男は立ち上がり、そこから消えた。

## 第六話

見張りの声がする前にシノは気づいた。立ち上がり、光って浮く。そして目には強い意志の光が。

部屋の中には母とエイタル。メガロは砦にいる者達へ事情を説明する為出ていつている。

「敵……ですか？」

「はい。どうやら元凶も来ているらしいです。これで終わりに出来るかもしれませんが」

微笑む。安心させてくれる力強い笑み。それでもエイタルは聞かすにはいられなかった。

「何か私に出来る事はないでしょうか？」

「そうですね……」

嬉しそうにシノは考え込む。

「この戦いが終わったら私を出迎えて下さい」

砦の皆が見つめる中シノは出陣する。砦の前の平原トカゲで埋まっていた。両の手を前へ。

風が唸る。

次々とトカゲ達は裂け消えていく。あっと言う間に平原からトカゲの姿は一体残さず消えてしまった。一人の男を残して。

長髪で黒衣をまとった男。

シノの顔に緊張が走る。

男は薄く笑うと両の腕を横にかかげ、手の平を下に向けた。トカゲが地面から湧いてくる。後から後から。それは止まらない。男を持ち上げながら盛り上がり、男を包み込みながら山のようになる。その固まりの輪郭がぼやけたかと思うと、次の瞬間一匹の巨大なトカゲとなっていた。



シノは両手を前に。風が飛ぶ。トカゲの皮膚の表面に傷が出来た。それだけだった。

トカゲは拳を握りしめシノに振り下ろす。シノはかわす。しかし、次々と繰り出される攻撃。シノはかわすばかりで防戦一方だった。このままではいつかやられてしまうだろう。

シノは空高く飛びあがった。トカゲは見上げる。手が届かない所に逃げられているというのにひどく余裕がありそうに見えた。

シノは見下ろす。その顔に浮かぶのは決意の表情。

シノは両手を上げ集中する。両の手の平から光が空へ伸びる。

空が割れた。轟音とともに何かが落ちてきた。

鉄の巨人。

白銀に輝くそれは目の前のトカゲと同じぐらいの大きさだった。胸の辺りが開き、シノを迎え入れる。

巨大トカゲの顔が引き締まったかのように見えた。息を吸い込むと巨人に向かって炎を吐いた。巨人は、シノは左腕についている盾でふせぐ。防ぎながら腰から剣を抜いた。炎が途切れた。瞬間、シノはトカゲを頭のでっぺんから真っ二つにした。

## 第七話

崩れながら黒い煙となって消えていくトカゲ。戦いは終わったのだ。鉄の巨人は再び胸を開いてシノを放出すると空へと消えた。

空中に浮かぶシノ。しかし、徐々に落ちていく。シノの意志とは無関係に。体の中から力が失われていくのが感じられた。

もう、自分は長くは無いのだろう。しかし、シノは満足していた。下を見る。皆からこちらに駆けててくる人々が小さく小さく見える。あの人の姿を探した。意識が無くなる前に一目、と。

（お疲れ様）

頭の中に声が響いた。夢の中で聞いたあの声。気品があって凜としていてそれでいて包み込むような優しさを感じさせる声。

「アン女王様……」

（あなたはよくやったわ。もう大丈夫。あの男のここでの体は粉々になって星に帰って行ったから）

「あの男のここでの体……？あの男っていったい……？」

（さあ？私は知らない）

明らかに知ってそうだったが疲れていたシノは流した。

「いろいろありがとうございました。皆を助ける事が出来たようです」

視線を下に向けシノは微笑む。

（うつん。あなたが頑張ったからよ。ご褒美に足は治しといたから。皆の感謝をしっかりと受け止めなさい）

「え……？私はもうすぐ死んじゃうんじゃ……どのくらい私は生きてられて……」

（え？死ぬ？誰が？）

「え？いや、わたしが。女王様がそうおっしゃって……」

（あ、あー……）

アンは何かに思い当たったようだ。

「ごめんね。あれ嘘」

後ろからいたずらっぽい声が聞こえた。振り向くとそこには夢の中で見たあの顔が。少しぼんやり透けていたが確かにそこにいてシノを抱き抱えていた。

「え……？」

「だってあなたがあんまりにも幸せそうで妬けちゃって妬けちゃってついついあんな事を……」

「ええ？」

「ま、いいじゃない。私のおかげでかなりアピールできたんじゃないかな。エイタル様だっけ？」

アンはにやにやとシノの顔を覗き込む。その表情は凜ともしておらず気品のかけらも無かった。

「い、いや、あの、それは、」

赤くなり慌てるシノ。

「それにね、私の力を使うと疲れるのは本当なの。遠くにいる私の力を中継してもらっているんだから」

シノはそう言われて自分の体がほとんど動かない事に気づいた。

「後は私に任せてあなたはゆっくり休みなさい」

そう言ってシノの頭を優しく撫でた。実体が無いアン。もしかするとそれは風だったのかもしれない。しかしシノは確かに感じた。優しい、母を思わせる手の平だった。

## 最終話

皆の皆が見上げ、ゆっくりと降りて来る姿を歓声を上げながら見つめていた。その姿が近づき、はつきり見えてくると戸惑いの声が上がりに出す。

「あ、あれ……」

降りてくる影は一人ではなく二人。

ぐったりとしたシノを抱き抱える見知らぬ女性。気品があり、美しい女性。皆が一つの名前を思い浮かべる。

皆のすぐ頭上でアンは止まり、シノだけがゆるやかに落ちてくる。集まっていた中の一人が慌てて受け止める。体は動かないシノだったが意識はまだあった。目も開けず、受け止めてくれた人を確かめる事は出来なかったが、その腕のぬくもりには覚えがあるような気がした。

受け止めた男は不安そうにアンを見上げた。アンは優しく微笑みかける。

「大丈夫ですよ。今は疲れて眠っているだけ。そのうち元気に目を覚ますでしょう」

その言葉を聞き、男はほっとした様子だった。

アンは皆に語りかける。

「スターフィールの民よ。私の名はアン。遠い昔、この地を統べていた者」

どよめきが起こる。しかし、疑う声はひとつとして上がらない。

皆はアンに注目し、次の言葉を待った。

「この地を脅かしていた危機は去りました」

一斉に湧き起こる歓声。皆、アンを讃えた。

「いいえ、私ではありません。私の力はすでにほとんど残ってはいませんでしたから。その女性に少しの手助けをするのが精一杯でした」

え、なんか話が違う。かろうじて残っている意識の中、自分を讃え、労う声を聞きながらシノは思った。

「私は今回かすかに残った力を使い果たし、もうじき消えてしまうでしょう」

しんと静まりかえった。

「私は長い生の間、一つの事を願っていました」  
薄れゆくアンの体。

「そしてこれからも祈り続けるでしょう」  
アンの体を白い光が包み込む。

「スターフィールに住む全ての人が幸せになれますように、と」  
皆、涙を流しながらアンの名を叫ぶ。

「皆様、お元気で」  
優しいな微笑みを残してアンは消えた。

体に力が戻ってくる。目を開けた。自分を覗き込む愛しい人と目が合った。

泣いていた。

微笑んでいた。

何か言おうとしたがその前に強く抱きしめられた。  
その胸に顔をうずめる。

あたたかだった。

## エピソード

「ねえねえ、おばあちゃん、今日もアン女王様の話聞かせて！」

あの日以来ハインはアン女王の話が大のお気に入りだった。そんなハインにフランソワも嬉しそうに話して聞かせる。

「……今日はここまでにしようね」

フランソワが語り終わるとハインは大きなため息をついた。

「はあああ……それにしても、聞いてるこっちが恥ずかしくなるような話だよ……」

幼いハインにそう言わせるほどに激甘なラブストーリーだった。

「しょうがないじゃない？　そういう話なんだから。……きっとあ  
の人が素敵過ぎたのが原因ね。どこかエイタル様に面差しが似てて  
……それでいてエイタル様よりずーっとかっこ良くて……」

フランソワの顔ににやけ笑いが広がる。

遙か昔、空から落ちて来た少女は一人の青年に出会い物語は始まった。

星歴元年、ア・ボーイ・ミーツ・ア・ガール。

完

## エピソード（後書き）

お読み頂きありがとうございます。  
私が流れ星に願うのはあなたの幸せ。  
それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8735t/>

---

星の王女

2011年8月6日03時17分発行